

会報 八丈島三根会



昭和 25 年度卒業

八丈島と三根と私達！

Vol.

3

2016 5.14

第 34 回八丈島三根会開催日発行

三根会の思い出と感謝

三根会名誉会長 高橋朝見

八丈島三根会は回を重ねて三四回、大変喜ばしいことである。機会を得たので、三根会に頭書から関わったものの一人として、いくつか想起してみたい。

○第一回の三根会は、約三百名の出席者。しかも、小沢初代会長の尽力による超一流ハワイアンバンド「バックキーシラカタ」の演奏で始まり、会の長寿と盛会を予言しているかのような素晴らしい集い。

○第三回ではなかったかと思うが、南大東島から数人の三根地区出身者が参加し、紹介された。

○三根小学校百年祭記念校歌碑協力。

「寄付金の強要をしない」（三根会発足時の確認事項）を踏まえ、昭和六二年、賛同者に限定し協力をお願いした。約四百名の方から百二十万余が集まり百万円を建立費用に謹呈した。郵便局の口座開設、賛同者の名簿作成、建立記念碑の写真の送付、会計報告が私の担当であった。

○三根会の開催を島内での声がある。

ちょうど十年前（二〇〇六年六月）「ふるさと三根会」が計画され、島外の三根会にも誘いがあった。当日、羽田へ行ったところ天候不良、欠航で不参加の一人となる。このようなこともあり実現が難しいのが実情である。

○最近では会場の事情で実施されていないが八丈島伝統の「太鼓」。加茂川会による三根伝統の踊りと唄など故郷からの協力を感謝を。

○三根会発展に尽力された方々に感謝を。

歴代の会長・幹事長は勿論だが、小宮山富之氏（二十年卒）、金川寅彦氏（二四年卒）、吉澤美穂子氏（旧姓田中二五年卒）は初期の尽力者で忘れてはならない方である。

○各学年の幹事さん、出欠の掌握・報告、総会の会費集めなどご苦労です。「学年幹事」は三根会の特徴、毎回の三桁の参加はこの賜物です。

○総会実行面での事務局の皆さん

開催準備・運営。会の盛り上げに常に腐心。会費の集計・確認等でゆっくり食事もできない会計監事、ご苦勞様です。

八丈島三根会のさらなる継続・発展と皆様の益々のご健勝を祈念します。

旅たちの片道切符

三根在住 昭和四十年年度卒 菊池 泰彦

春になり、今年も旅たちの季節がやって来ました。島の子供たちの大多数は、就職、進学で親元を離れる宿命を持っていきます。

春は旅たちの時、そして別れの時。

親は子供たちの成長を喜ぶ半面、言葉では言い表せないほどの淋しさを感じます。

まんでも鮮明に覚えている光景があります。

私が中学三年の時、集団就職でくへ旅立つ同級生を見送るため、港へ行きました。

そこには、着慣れた学生服やセーラー服に、ボストンバックをひとつさげ、しょくなっけ土地に向かう不安と、ちとばかりの希望の入り交じった顔の同級生がいました。

港には見送りのために正装した親や親戚、同級生でごった返ししていました。

はしけに乗った同級生は、色とりどりの紙テープをしっかりと握っていて、それはまんまでの思い出を一本の線でき、この思い出をお互いに決してひっかすりんのうごんしようという誓いであるかのように思えました。

中学を卒業とともに十五歳の同級生が本土の大きな荒波の中に旅だっていくのです。

「アバヨイヨ アバヨイヨ アバヨイヨ ガンバレヨヨ ガンバレヨヨ」の応援の声に包まれて、はしけで出ていこうだらう。

隣にいた同級生の母ちゃんは、はしけの子供に向け「○○がんばらだうよ がんばらだうよ 思うはよ」と涙を浮

かべて大きな声で叫び、船が見えんのがうごくなるまで名残惜しそうに手を振っていました。父ちゃんは寂しそうな顔をし、後ろのほうで煙草をくゆらせていました。それは離島という運命によって我が子との間を切り裂かれるような、帰りの日が決まっていな、片道切符の旅でした。

旅たちの人の目にも、見送る人の目にも涙が浮かんでいました。

港の別れは寂しく悲しいものだらよ。

長い船旅の途中、母ちゃんの作ってくれたうんまけにぎりめしを、すべてを包んでくれる母ちゃんを思い出しながらかんだそうです。

故郷も母親に似てすべてを包み許してくれる場所だと思います。

島を離れてからもまた寂しい別れがありました。引率してくれた先生との惜別です。

仕事場を覗いた後、ガンバレヨという言葉を残し歩き出す先生、何度も何度も振り向くといつまでも手を振る子供の姿がありました。

先生が角を曲がると、いよいよ旅立ちの始まりだったのです。

時代は変わり、まんの旅立ちは、空港が主になります。

同級生を見送る風景は変わりのうが、子供が待合室に入るまで、にぎやかで明るい会話がつづき悲壮感はまったくなくなっけだら。

島は、海を渡らなければならぬので、簡単

に戻れないのは昔と変わりんのうが、またすぐ会える（メール、LINE、Facebookなどで島と外がつながりやすくなっている？）往復切符の旅立ちなのです。

わいらが時代のように成人式にはまた会おごんよと別れの旅立ちではなくメール、LINE、Facebookに連絡けるよ、お互いがんばろごんていうつながりで、笑顔の旅立ちなのです。

そんな変わっていった島の姿を見てうれしく思う一方で、同級生との会話では「貧しきよりくにへの憧れで就職し、着いてから働く所の主人と初めて会ったうだら」

「そごんだらばく見合い結婚よりひどけじゃ、まんなパソコンのボタン一つで百社を超える企業の募集要項を一括請求できる時代どうに」

「わいらが時はしょうがなかるーだら」などどこか昔を懐かしむことが多くなつたように思

います。

三根会に出席の方はいつの間にか、故郷を離れて四十年以上たっている人も多いと思

います。一年一年遠ざかる故郷を思い出す時、逆に一年一年近くなつて来ている故郷です。

故郷のある人生は幸せです。

親がまるんでも同級生に会いに帰省してください。

旅立ってそれぞれの場所で頑張った同級生と「うごんだらら、こがんだらら」と中学時

代のたわいない話をしながら飲むのは至福の

時です。

みんなの笑顔と笑い声があればあんにもいりんなつきや。

同級生はみんなの宝物、同級生は死ぬまで同級生、死んでも同級生、勝手にやめることはできない。

同級生に乾杯、八丈島に乾杯、三根会に乾杯。

紹介 八丈・島ことばカルタ



○作 画 菊地泰子

発行：八丈島教育委員会

○監修者 沖山 彰（三根）、浅沼 研（大賀郷）、伊勢崎 武二（榎立）、山下 芙美子（中之郷）、沖山 慶孝（末吉）

会員便り

「石垣に魅せられて」

私の育ったところは三根「洋望」地区で海岸が近く八丈富士の裾野辺りになります。工事などで地面を掘ると赤味がかったきれいな色の溶岩がザクザクと表れます。大小様々で改めて自然が成した美しさの発見でした。

大里の玉石垣と違って三根地区の石垣はほとんどが八丈富士からの不規則な溶岩で仕上げられています。その古い石垣は年月が醸し出す緑の苔に覆われ、それはそれは美しいものです。近年、新しい住居が増えるのに伴い、古い石垣が撤去されがちです。残念なことです。

島で車に乗って観光に出かけて素通りする所ものんびり歩いて観光してみるそこそこ島の自然のすばらしさに気が付いて全く違う旅になると思います。

自分の育った八丈島を改めて春夏秋冬ゆっくり歩いてみる事をお勧めします。子供の頃の目線とは違う良さが発見できます。溶岩の石垣とコールタール色の黒い屋根はとても似合う八丈島唯一の私の心の原風景です。

36年度卒 (Y・H)

八丈島の椿油作りの思い出

昭和27年ごろ、八丈島の思い出の一つに椿の実収穫の作業がある。当時は、椿山を持つ家庭では椿油の製造が盛んに行われていた。

私の家でも椿山があり、秋の椿の実収穫の時期になると、日曜日に一家総出でお昼弁当を持って椿の実の収穫に行きました。

私も中学のクラスメート2名を連れて作業に加わりました。長い竹の先に、太い針金のカギ付けたもので、椿の実をもぎ取るのです。

椿の木も相当に高く伸びたもので高所での作業となりました。足場をしっかりと作りながら、実をもぎ取る作業で足を踏み外したら大けがをするような作業でした。したがって、私たち若手が木の上の作業に従事しました。下では、年寄りや女性が落とされた実を拾い集める作業をします。

何十本もの木を移動し、椿の実を取り終わる頃には足の裏が痛くなりました。収穫した椿の実を袋に詰め自宅へ運びます。

椿の収穫作業も楽しかったけど、木漏れ日のこぼれる、木の下でゴザを敷き、野鳥の声を聞きながら母が作ってくれた、おにぎりや煮物、漬け物、缶詰などを食べる昼休みのひと時も楽しいものでした。椿の実は、殻をむき熱湯で蒸かし、厚い木でできた油搾り器で油を搾り出すものでした。一番搾りの油は高値で出荷でき、2番搾り、3番搾りは自宅で調理用として天ぷら揚げに使いました。その美味しさもさることながら、ずいぶん贅沢な使い方をしたものです。椿油は、昔から八丈島では女性の髪の毛の調髪料として使っていたそうです。

理容師さんから聞いた話ですが、リンスが豊富でなかった昔は椿油をお湯に数滴たらしリンス代わりに使っていたそうです。

八丈島の女性の髪の毛が黒いのも椿油の効果だと聞いたことがあります。シヨメ節にも「黒い髪の毛、長さは背丈、可愛いあの娘は島育ち」という唄もそのあたりから歌われたのでしょうか。今、椿油を作る家庭はなくなりました。当時は椿の木が多く植えられており、メジロのさえぎりも多く聞こえました。椿油の効果は大きいようで最近、テレビのコマーシャルなどで放映されています。そんなことから昔の八丈島の椿を思い出し、文字を並べてみました。



東京在住 (H・K)

海の幸が豊富だった八丈島の海岸

今から60数年前、私が中学生の頃の八丈の海は漁場も豊富で鯛科の高級魚である「アオゼ」や「オナガ」等がよく釣れた。天草などの海藻やアブキ、メットウなどの貝類はよく獲った。伊勢海老も獲れた。大きな鍋で茹でて、おやつ代わりに腹いっぱい食べた。「むろアジ」も豊富で「むろアジ」の群れが見えると、底土の船揚げ場から船を出し、たて網式という漁法で「むろ」や「かりぬき」などの群れを取り囲みながら網を絞り込み、網の中に入った魚を獲った。網にかかっていた「むろ」をもぎ取り、立ち泳ぎをしながら海の中で手で料理し、塩水で食べた味の美味さは今でも覚えている。大漁の時は、伝令が関係者の家に連絡をして回り、カゴをしょった女性群が底土の船揚げの広がった芝生の上に分けられ、並べられた魚をカゴに入れて持ち帰りました。中学生だった私も泳ぎが得意だったので、大人たちの中に入り、網の絞り込みの作業の手伝いをしたので、同じように分け前を貰った。当時は、天草漁も盛んで島の産業として海の男たちの大きな収入源の一つだった。天草の解禁日には、底土の主みたいなおじさんの赤旗の合図で海岸で陣取った天草獲りの人たちが、一斉に海に飛び込み天草獲りが始まるのです。夕方の日暮れ近くまで続き、獲った天草は木綿糸で編んだ「すかり」という網袋に詰め込み天草場まで運び、それを平たく伸ばして干してゆくの。中学生だった私も解禁日には学校を休んで天草獲りに専従しました。当時は、天草を獲れる生徒は公然と休みがとれました。天草は水で白く晒し干しあげるのです。干しがあがった天草は、天草倉庫（現在の大神宮前の広場にある倉庫）に持ち込み計量され、出荷されます。私も大人に引けを取らない位の売り上げがあり、その現金収入は家系の足しになっていたようでした。小遣いを貯めて買ったカメラは、骨董品として今もタンスの中に眠っています。ともあれ、あの当時の豊富な海はどこへ消えてしまったのか。今は、どこの海を泳いでも海藻も貝も姿を見ることができません。魅力無くなった海は、あまり泳ぐ気持ちを持ってなくなりました。海を見るたびに、昔の海に戻ってくれることを祈る今日この頃です。

八丈島在住 (Y.K)

うた

おつきさま
ゆうがた お使いに行った時
お月さまが でていた
わたしが 走ったら
お月さまも走った

昭和 33 年～36 年
の文集より A・K

タイムマシンの風に乗って

うみ

海は どこまで つづいているのだろう
とうきょうかな
アメリカかな！
とうきょうへ いきたいなあ！
そらは 海と おなじかな

昭和 33 年～36 年
の文集より M・T

水たまり

水たまりの そばを あるくと
木とくもが うつつている
わたしが あるくと
木も あるいて いるようだった
とまると 木もとまるように みえた
わたしは くもを あるいているようだ

昭和 33 年～36 年
の文集より A・N

私たちが三根小学校を卒業するとき恩師の先生方はどんな言葉をかけてくれたのでしょうか。昔に戻って思い返してみましよう。

美しい八丈富士 雄大な三原山
限りなく広い海 このすばらしい
ふるさとに恥じない人にならう

W. Y 先生

鉄は 熱いうちに きたえる
人間は若いうちにきたえよう

A. K 先生

よく見よう
そしてよく考えよう
そして動こう

N 先生

きょうの仕事を
明日に のばすな

Y. Y 先生

人にめいわくをかけない人にな
りましょうね

S 先生

自分の眼で見 自分の頭で考え
自分の足で歩いていけ！

S. M 先生

元気で がんばろう

カミナリ先生

三根小学校・富士中学校での思い出

佐々木逸郎「富士中三十二年間在職」

私が八丈島に移住して来たのは戦争が終わった昭和二十年の暮れでした。当時の島の家々の周りの垣根や道端の土手の上には椿の木が多く、道路には花が散り敷かれて、真っ赤な絨毯の上を歩いていけるような気分だったのを鮮明に覚えていて、三根小学校の校庭には畝の跡があり、確か軍隊が野菜、主にサツマ芋を栽培していたと聞いたのを覚えていて、

低学年の時は、「男女席を同じゅうせず」ということで、男組と女組に別れていて、男女共学ではなかった。

二年生の時に一寸の間給食があり、食材はサツマ芋と魚の干物だったように記憶に残っている。

何のための集団登校だったのか、各地域（部落）ごとに集まり登校したこともあった。

上級学年になると木に登りサクランボを採り、新入生に食べさせましたが、木の上でたべることは禁止されているのに食べて、木から下りてから口の中を検査され、k・k先生に殴られるという苦い思い出もある。

当時、地域のあららこららに野球チームがあり、交流試合が盛んに行われていた。ズックのグロブやボールを買うために、ホウキ竹を切りに行き、ホウキを作り皆で売り歩いたこともあえる。

富士中学校は昭和二十二年四月、三根村大賀郷村学校組合立として発足し、三根教場と大賀郷教場とに別れていた。先生方は午前中三根、午後からは大賀郷といった具合に自転車や徒歩で移動していた。天気の良い日はいいが、雨や風が強い日など大変だったろうと思う。三根教場は三根小学校の裏手にあった講堂のような建物と仕切ったもので、廊下側の壁やドアの無い教室だった。

クラスは三根が松・竹・椿、大賀郷は梅・桜だった。運動会・学芸会・式典などは三根と大賀郷で交互に行われた。

やがて中道の現在保健福祉センターの所へ富士中を建設するため、の整地が行われたが、大賀郷側が分離独立して大賀郷中学校となったため、三根は現在の富士グランドの所に、当時としては大変珍しく島内は勿論、島外からも見学・視察に訪れるというブロック建築による校舎を新設し、移転したのでした。

現在、富士中、大賀郷中学校とも生徒数が大変少なくなっているが、それを予測してか当時の小宮山才次校長先生は富士中が分離することを非常に憂えていたことを何度となく耳にしている。

行事では養蚕休業がありました。男子生徒は近所の様蚕家の桑の葉採りを、女子生徒は蚕の雌雄鑑別などの仕事に携わりました。

水泳大会は神港漁港で行われました。漁港に漁網の浮きをつけたロープでコースをつくり行われました。漁師さん達は帰港を遅らせるなどして協力して下さったようです。

天草ヤトコブシの解禁日は職業実習ということで休みになりました。大人が採ったものと混ぜて売ってもらい結構な小遣いになった記憶があります。

三原山の頂上付近に植林した杉の下草刈りも大変だったけれど懐かしい思い出として残っている。

私が新任教師として富士中学校に赴任したのは昭和三十六年でした。

その頃東京から赴任してきた先生が、下宿の女将さんに「とびいあがりやれ（飛び魚を召し上がれ）」と言われたのに、おむむろに立ち上がって飛び跳ねたことは、今でも思い出すたび笑えてくる。

また、修学旅行で船が東京湾に入った時、電車が走っているのを見た生徒が、「電車がめいろわ。出てきて見ろ。」などと皆ではしゃいでいたのも忘れられない。当時としては修学旅行前に上京したことのない生徒が殆どだったことを思えば当然のことであらう。

空港拡張のため現在の校舎に移転する時に、全校生徒が机や椅子、その他備品などを持って、働き蜂のように行列をつくり、汗をかいて頑張ったこと、運動会でのフォークダンス、マスゲーム、応援合戦、特に観客に人気のあった富士中行進は脳裏に焼き付けられ、何時までも忘れられない思い出である。

取り留めのないことを書いてきました。最後に皆さんのご健勝と三根会の益々のご発展を願って筆を置きたいと思えます。

第34回八丈島三根会総会

- 11:00 三根会総会開催 (司会 幹事長 峯元 信博)
会長挨拶 会長 小宮山 肇
会計報告 会計 佐藤 千鶴代
会計監査報告 会計監事 須藤 保
懇親会 (司会 副幹事長 小宮山 稔)
来賓挨拶 八丈町町長 山下 泰也
来賓挨拶 八丈町議長 土屋 博
来賓挨拶 三根小学校校長 鈴木 勲
- 11:30 乾杯 名誉会長 高橋 朝見
<歓談>
八丈ショメ節大会
三根在住有志 会員有志
恩師紹介 会員有志
学年クラス紹介 30年、35年、38年度
懐かしのフォークダンス 有志全員
<歓談>
- 13:50 校歌斉唱 (全員) 会員有志
万歳三唱 副会長 太田 中
- 14:00 終了

三根小学校校歌

作詞 野口雨情
作曲 藤井清水

一、朝日はのぼり輝やきて

八丈富士の峰高く

仰ぐわれらの三根校

仰ぐわれらの三根校

二、剛健不撓の精神に

流れも強き黒潮の

沖ゆくごとく進みなん

沖ゆくごとく進みなん

三、磯うつ浪の絶ゆるなく

朝に夕べにいそしみて

いざもろともに励みなん

いざもろともに励みなん

協力

・八丈町役場

・八丈町立三根小学校

・八丈町立富士中学校